

66 『病論俗解集』について

永嶋泰玄・岩田源太郎・大井康敬

日本鍼灸研究会

『病論俗解集』は、江戸前期に刊行された著者未詳の医学用語辞典である。一六三九（寛永一六）年刊行の村上平楽寺版が流布本であるが、一六四八（慶安元）年などの刊行も確認される。前記寛永一六年版に一六八六（貞享三）年刊行の『病名彙解』を併せた縮印本が、『病論病名集』の名で一九七二（昭和四七）年に文史哲出版社から、一九七九（昭和五四）年には大阪の前田書店から出版されている。寛永十六年版は縦十四cm、横十八cmの横本で、本文五十六丁、後序・刊記一丁、都合五十七丁からなる。有名な『病名彙解』に先立つこと五十年、おそらくわが国最初の医学用語辞典ではないかと思われる。

本書の刊行元・村上平楽寺は、村上浄徳が慶長年間に創業、初め鞍馬口に、次いで二条通玉屋町、二条通

車屋町角へ移転した。『病論俗解集』は二条通玉屋町時代の出版である。

本書では二文字～四文字程度を主とする一〇六六語をイロハ順に配列し、用語の大半に振り仮名を附し、概ね簡単な和文で解説するが、時に漢文を交えることもある。収録語は、書名から想像されるように全てが病證用語というわけではなく、身体部位名や日常用語もかなり含まれている。その内訳の大略は、蔵象・病證用語を中心とする医学関連用語が五割強、身体部位名が一割弱、日常用語が四割程度を占めている。すなわち本書は、江戸中期以降に作られた医学用語辞典、たとえば『病名彙解』や『談疾語證』『疾雅』のような、採録を病證名や病名に限定したものと異なり、医書所載の多彩な言葉を広く収録解説しており、蔵象、病證、身体部位などを網羅した総合医学事典の簡略版のかたちとなっている。

本書で最も多数を占める蔵象・病證用語の場合、解説の中心は、漢語の和名への置き換えや主要症状を述べることにあり、病の機序にまで踏み込んで解説する

ことは少ない。また病證用語の中には、後代の医学用語辞典では採録されることの少ない「戰慄」「冲冲」といった語もかなり含まれている。病證用語以外の医学関連用語では、経絡経穴（「人中」「中脘」「経絡」など）、薬物名（「松脂」「芝麻」など）、治法（「佐使薬」「調氣」「導引」「蟻鍼」など）、脈状（「尺脈實強」）、季節関係（「長夏」「時令」「天令」「大氣」など）が見られるが、その数は僅かである。特異なものでは、職業名「坐婆」や、「史記」扁鵲伝に見える「上池水」という語が見える。薬方名、人名、書名の類は全く見られない。

身体部位名では、五藏名の採録は無いが、六府は「大腸」「小腸」「膀胱」が採られている。蔵府関連では他に「心主」「命門」がある。日常語では、「飲食」のごく日常的なものと、「俛仰」「周身」「精微」のように、医書に使用されるものの両方が見られる。本書の編集意図は、巻末の後序に「此の書の編集する所以の者は、庸医童蒙の爲め和訓を加えて以て世に行うなり。故に聖者は之れを用いず。然り抄物一器の如し。唯だ此の書は衆医書に通じ、病論、昭著せざる

無し。然れども盡くは詳備せず。漸く以て之れを校べ、後人、詳審して之れを改むべし。」とある通り、慶長年間以降盛んとなった中国医書の翻刻と、当時全盛を誇った李朱医学の学習に対応する目的で、初学者のために作られたものである。本書は医学辞典としては初歩的な段階にあるが、にもかかわらず、中国医学用語を一冊の辞典にまとめようとする試みは、先駆的なものであったと考えられる。